

卒業生諸君へ

住 谷 悦 治

卒業生諸君ノわたくしは諸君が大学という、いわゆる最高学府を卒業されたことについて、一応の祝賀を表するのであります。とくに、一応のというような、失礼な言い方をする理由は、諸君の御父兄が長い年月と多額の費用とをもって諸君を大学に送られ、諸君が大学教育を卒えられたということについては、御父兄のためには全面的に祝賀申し上げる次第であり、事実、さぞ御安心とお喜びに充ちあふれていらつしやることであらうと思うのであります。卒業生諸君にたいしては、いま確信をもって、手ばなしで祝賀するというわけにはいかないので、そのために、一応のという形容詞を附したわけであります。その理由を述べることが、卒業生諸君へ寄せるわたくしの言葉であり、義務であると考えています。

いまわが国の大学のみでなく、おもだった国でも大学生の学生運動が熾烈^{いしれつ}をきわめており、社会の人びとからの批判が盛り上っています。大学生への不信、大学教育への不信、さらに大学の制度そのものの不信というように不信感が強く述べられ、あるい

は考えられているのでありますが、その深い原因は矛盾した社会と政治が多く負うべきであります。しかし直接には学校と学生とに降りかかる批判であります。そうした現状の社会に、愛する学生諸君を、卒業生として送り出すことに不安を感じざるを得ません。考え方によつては祝賀どころのさわぎでなく、自粛、自戒と警告および異常な覚悟を必要とするという厳しい現在であります。

諸君を卒業生として社会に送り出すことは、にがい湖に放つてやるようなものであり、荊（いばら）の道に追いやるような感じもします。しかし、諸君が全力をあげて心の底ではにがい湖の水を甘く変えることができるように、荊の道を、坦々たる立派な道路に切りひらくことができるようにと、希っているのではありません。それにもかかわらずわたくしが不安を感じるののは、現在の大学生の実力が、果して、社会の需要に応じうるか、われわれ大学当局が自信をもって社会に送り出せるか、しかも社会を、若い人びとの協同の努力で、より高い文化、より良い生活に築き上げる

覚悟があるか、ということであります。

ある大学のある統計によりますと、学生の将来の希望や意図のうち、(一)個人幸福型ともいふべきもの、いわゆるマイホーム型が圧倒的多数の四七、八パーセントで、(二)立身出世型といわれる栄位栄官、地位、財産、名誉をまっしぐらに望む優勝劣敗、弱肉強食的な、自己中心主義で他人の迷惑、他人への思いやり、社会の矛盾など考慮するいとまのないような驚進型が二二パーセント余(三)自分一人の幸福のみでは真の幸福はもたらされない。社会の人びととともに、幸福になることが結局自分の幸福であると考えそのための努力を怠るまいという社会改良型が二二パーセントという結果が出たそうです。これら「型」の種類の選択等に或は批判があるかもしれませんが、大体の大学生の考え方の指標として判断の参考にはなると思います。この社会改良型といつても、もちろん共産主義、社会主義、社会政策、社会福祉、慈善事業、その他、いつさいの人民解放運動への多様複雑性を含んでいますが個人本位主義でなく、「社会本位の社会原理に立つ社会」という高い文化的理想と結びついた考えをいつさい含んでおりますから、分析の必要はありません。しかしながら、このいつさいを通じて、わたくしは、卒業生に望むことは、新島襄先生の遺された言葉として「良心の全身に充満する丈夫」ということ、あるいは「良心」を日常の行動手腕に運用することを忘れない人物をめざすこと、これであります。そのことは、人間をして生き甲斐を感じしめる最も高い、尚も立派な人生的態度であり、人生不朽の立場であると信じます。それこそ、がき湖の水を甘くし、荊、道

を坦々たる後人の通る良き道に変えることであると思います。

もう一つのこと、大学は必然的に社会へ出る「前段階」であるけれど、けっして単なる「手段」ではないということであります。これは大学教育の大切なところですが、諸君が、大学を単なる手段と考え、学科の各単位を最小限度に合格すれば、大学卒業生として、高校や中学卒業生以上のサラリーにありつけ、社会からもある程度尊重され、エリートとしての自信や地位を得られ、ある程度の安易な、個人幸福の生涯を送りうるなどと考えるならばそれは大学卒業生として、下の下の立場であること、大学は「手段」ではなく「前段階」としての意味をもつものであるから立派な社会人たることに直接自身が連結していることを覚悟すべきであり、「手段」であると考えた浅はかな、常識的な考えをこのさい、抛ち、そうした安易な人生的態度といさぎよく訣別して欲しいと思います。いまこそその絶好の機会であり、それこそ真の「初心」であります。「初心忘るべからず」と孟子が説いた意味は、単に十五才にして志を立つとか、十八才にして志を立つとかいう意味を越えて、今こそ、ここで断固と決心して、一つこういう決心でやるぞと思い立ったとき、そこでの決意が「初心」であると解釈すべきで、つきつめるならばわたくしお互いに「日々の初心忘るべからず」でありたいと思います。

十二月三十一日と一月一日と、いったい時間の経過連続、自分の生活、肉体に、どれほどの差異があるでしょうか。少年と青年、青年と壮年、壮年と老年。そこにどこに、どのような区別があるでしょうか。それは生命の一つの連続であります。それにもかか

わらず一月一日を考え、成年式を考えるということは、連続した時間と肉体とをもったわれわれが、そこに一つの決意をする人生的態度としての「けじめ」をつけるためであります。大学卒業ということも同じであります。諸君の「卒業証書」は果して真の「卒業」の証書であるか、真の大学生としての学問の「修業」の証書であるか、四年間大学に在学した「滞学証書」であるか、場合によっては、四年間の「授業料納付証書」であるか、ということをも反省すべきときであります。わたくしは、卒業生諸君が、すべて、真の意味での大学卒業証書を授与されて卒業し、社会の激流の中へ乗り出す覚悟を持っていることを信じていたのであります。ゲーテが「知識は静寂のうちに、そして性格は激流の中で形成される」と言いました。諸君はこれから社会の激流の中で、良心をもった勇ましい性格を形成されるよう切望します。いまこそその覚悟を決めるときであり、いまこそ、この「初心」を発揚すべきときであると思います。

もう一つ最後に申し上げたい。人間には「天才」という人もたしかにあるでしょう。頭脳のとくに優れた素質の人がかつて存在し、現在も将来も存在するであります。しかし、天才という人の伝記を読んでもみますと、そのほとんどが、努力をしていますが。ひそかに、時間を利用して勉強し、刻苦精励していました。それであるからこそ、天才といわれた最近代の彫刻家オーギュスト・ロダンは、「天才？ そんなものはない、勉強だ、努力だ、つねに計画していることだ」と言いました。また天才発明家といわれたエジソンは、自分の過去を顧みて「その九十五パーセント

は Perspiration(発汗)だ。あとの五パーセントが Inspiration(靈感、天外の心の閃めき)だ」と懐古しました。パースピレーションとインスピレーションという語呂の面白さや詩的表現はありますが、人生の大部分は努力であること、発汗して精励したことをよく物語っております。さらに頼山陽は「世の人がわれを天才というのは、われを知るにあらず、よく努めたりと言ってくれる人こそ、われを知るものである」と言いました。吉田松陰も「人一度して之を良く為(す)れば己れ之を十度す、人十度して之をよく為(す)れば己れこれを百度す」というようなことさえ述べています。天才などということを考えるより、われわれは天下の平均人として自覚し、努力し、高い理想とか目的に向って鋭意努力精進すべきであると思います。前進また前進、創意的努力また創意的努力、日常の生活を、日常の業務に徹し、習熟し、自分の与えられた才能を磨いて行きたいと思えます。人間は元来不完全、未熟のものであり、未完成交響曲を奏でていくものですがそのことを承知しつつ、不断に、努力をつづけ、生き甲斐ある生涯をつくりあげたいと思います。諸君も未完成である、わたくしら老年も未完成である。しかし、人生への態度は、同様に良心的に、誠意をもって日常の業務に努力したいと思えます。多少多岐にわたりましたが、これらのことをいま卒業される諸君へ寄せる言葉といたします。

(総長)